

コロナ禍やウクライナ危機などによって、私たちの社会は急激な変化が続いています。そんな中、変わらない笑顔で接客をする奥嶋ハル子さん（左）。田渡地区の土曜市「およりんか」でメンバーの皆さんと一緒に野菜などを販売しています。大正15年から96年間、波乱万丈の人生を歩んできましたが、「時代時代に合わせて一生懸命生きたらいい」と笑います。今回の特集では、こんな時代だからこそ大切にしたいこと、子どもたちに伝えたいことを考えます。あなたは今日をどう生きますか？ どんな姿を未来を担う子どもたちに見せたいですか——

my life *Today*

あなたは今日をどう生きますか





地域に親しまれてきた大榎を振り返る

1,2_いざぎ大風合戦の歴史も見続けてきた大榎。風が引っかかるのはご愛嬌 3_毎年1月に開催されるシクロクロスの大会ではコースの一部となっていた 4,5_子どもたちに人気のイベント「大きな榎の木の下で」。榎がデザインされたケーキや寒い中でごみを拾った思い出を忘れないでほしい 6_ライトアップされた大榎

数百年も小田川を見守ってきた町のシンボルが折れた日――



無常の世だから、今こそ伝えたい

当たり前にずっとあると思っていたものが、突然になくってしまう驚きと寂しさ――町の天然記念物「豊秋河原のエノキ」の今の姿が、それをシンボルとして活動してきた人々に衝撃を与えています。

「大きな榎の木の下で」の小野代表は寂しがりながらも、今だからこそ変化を恐れず、大切なことを伝えるために動く時と意思を語ります。

目的は守ることではなく
子供たちに語り継ぐこと

「大きな榎の木の下で」代表
小野里枝美さん（昭和）

「町のシンボルだから、無くなるのは寂しい」と話す小野里枝美さん。20年ほど前から「大きな榎の木の下で」という会に参加し、今は代表を務めています。会と同名のイベントが始まったのは30年前。全盛期は180人もの参加者がありました。「私が参加を始めた当時から環境配慮型のイベントで、スプーンや皿を持参して、ごみを出さないようにしていた。途中から河川の清掃活動も始めたので、きれいな景色とおいしい食事と合わせて、子どもたちのいい思い出になればいいなと思っていた」と振り返ります。

毎年12月のイベント開催日には、大榎のライトアップの点灯式も行っています。豊秋橋からも見える、冬の風物詩です。成人式もある時期だからと加える小野さん。大人になる子どもたちに向けて「ふるさととは変わっ

環境保護のシンボルの存在
今年9月6日、町の天然記念物の「豊秋河原のエノキ」（以下、大榎）が折れました。台風11号による強風が原因です。樹齢250年以上といわれる老木で、樹勢も衰えつつありましたが、樹木医の保護措置などを行いつつ、地域の人々に見守られてきた大木でした。

昭和50年代後半に河川敷一帯の改修計画が持ち上がったときは、美しい小田川の景色を残したいと立ち上がった住民たちの環境保護活動が行われ、当時では珍しい近自然工法での護岸が整備されました。それ以降、大榎は美しい河原を守ったシンボルの存在になっていたので、地域の人々の衝撃は大きいものでした。

変わり続ける町の景色

専門家の見解によると、木の内部は腐朽が進んでいて、辛うじて生きている状態。このまま残しても2〜3年もつかどうかとのことです。町では倒木の危険性を考慮して伐採する方向で検討中――。町に溶け込んだすてきな風景が、また一つ消えていこうとしています。



てないよ。おかえりー」というメッセージを届けています。

「地域の人々の河川を守るといふ熱い思いと、子どもたちのためにという純粋な思いを、次の世代につなぐのが私の役割だと思ってやっていた」と語る小野さんですが、「若くて元気な時はできたことも、だんだんできなくなった。大榎が折れたとき、時代が変わったのかもしれない」と心境を打ち明けます。

「大きな榎の木の下で」は次の31回目が最終回。大榎に感謝を伝えると同時に、「第1回」の会を開催し、新たな気持ちで再出発します。「折れた木の一部は『ゴカリナ』という楽器にして小学校に寄付する予定。使いながら由来を語り継いでほしいです。大切なのは、ここに大きな榎の木があったことと、この小田川の美しい景色が変わらず残してほしいと伝えることだから――」



昭和初期の茶の間の夕食。暮らしぶりだけでなく、使われていたさまざまな民具も描かれている（土居家提供）

語り継ぎたい、土居通康さんが描いたふるさとの記憶——

変化の時代の今、心をひかれる「記憶画」

土居通康さん（享年69歳）の絵からは、日々の暮らしの中にある幸せを感じます。急激に変化する社会で生きる私たちに、失くしてはならない大切なものを教えてくれているようです。残された時間があまりないと悟った通康さんは、記憶画9点と家族のために描いた絵日記を残しました。三女的美紀さんと四女的美香さんの話から、絵に込められた通康さんの思いに触れます——。

Interview

闘病しながら描いた絵

「父が本格的に絵を描き始めたのは、病気のことが分かってから——」と話し始める、美紀さんと美香さん。「闘病は約3年間だったけれど、最後の方は描けなかったもので、2年ほどで描いたもの。体調がいいときは一緒にドライブに行つて、帰ったらすぐに日記のように描いていた。私たちが『さつま汁』が好きだったので、そのレシピを絵と一緒に残してくれている。私たちが喜ばせたかったのかな」と話す姿に、通康さんの人柄が浮かんできます。

通康さんは子どもの頃から



（左）中塚 美紀さん＝内子12＝
（右）土居 美香さん＝大平＝

絵が大好き。本格的に絵を勉強したかったようですが、若くして両親を亡くし、長男だったため絵の道は諦めました。それでも、昭和59年発行の『小田の昔話』の挿絵や城の台発掘調査の鳥瞰図を依頼されるなど、絵の才能は地域でも有名でした。「絵で地域の役に立てたのがきっかけだったと思う。昔から人のため、地域のためという思いが強かったから」と美紀さんが言う。『昔の生活の写真は残ってないから、こんな史料があったら面白いやろ』と絵を描きながら言っていたのを覚えている」と美香さん。「私たちは、ほんわかした気持ちで見ている絵だけど、いろいろ調べてもらって、未来に何かを残そうと

意志を持って描いたことを知った」と亡き父に思いをはせます。秘められた思いを読み解く

「小田のふれあい講演会（詳細は次ページ）」で、通康さんの記憶画を題材にして講演をした井口梓さん（愛媛大学社会共創学部准教授）は、「地域の人たちの聞き取りから、通康さんの絵は人々の顔を含め、かなり精巧に描かれていることが分かった。『現代絵農書』ともいわれ、庶民の歴史、生きざまが込められた史料的に価値のあるもの」と解説します。調査に協力した美紀さんと美香さんも「80、90歳の時に当時の話が聞けたことは貴重。多くの人が懐かしんでくれたのがうれしい。小中学校の取り組みもすてきで、子どもたちの姿を父が見たら本当に喜んだと思う」と目を細めます。「どんなに便利になっても世界は変わっていくけれど、こういう時代があったことを子どもたちに学んでほしい」「昔のこんな生活でも幸せだったはず。父の絵と思い出は増えないけれど、残ったものを大切にしたい」。二人の思いは、きっと通康さんの思いと通じています。

《記憶画の説明》

通康さんの幼少期を描いた記憶画9枚が残されている。全て記憶の中の映像をもとに描いているが、牛車の車輪や神輿の装飾など、細部までかなり正確なことが分かった
3_ 自宅があった大平地区の棚田と通学路 4_ 分教場の昼休みの様子。「輪回し」などで遊んでいた



（土居家提供）



2



1

1_ 大洲市の赤レンガ館で個展を開いた通康さん。妻・澄子さんとの記念写真 2_ 釣りが好きで、家族で行ったことを描き残していた。たくさんの思い出がつづられた日記の冒頭には「この日記は子供や孫たちが見てくれればいい。晩年のじいちゃんのあほな生きざまが見えるだろう」と添えられている



my life Today
あなたは今日をどう生きますか

1_かるた札を手に笑顔を見せる児童たち 2_絵の感想を出し合いながら、活用方法などを話す中学生 3_かるた札を取ったら、それが何かを大学生が丁寧に説明していた 4_楽しい声でにぎわう会場 5_会の準備をしてくれた愛媛大学の皆さん



子どもたちが大きな絵の中に入り、タイムスリップしたような学びの場——。11月16日、小田小・中学校の児童・生徒を対象に同校の体育館で開かれた「小田のふれあい講演会」の様子です。「のぞいてみよう！ まかしの小田のくらし」大切にしたい小田の文化」と題して、愛媛大学の井口梓先生と学生たちが、小学生と「かるた取り」や「絵探し」、中学生とは今と昔の価値を話し合うワークショップをしました。

学生たちが用意したのは、土居通康さんの絵をA0用紙9枚分に拡大した巨大な記憶画6枚。その中から46個の昔のモノやコトをかるたにしました。取ったかるた札が何を表しているかを探す「絵探し」にもなっています。楽しく学んだ子どもたちは、「小田の良さが分かった」「受け継がれてきた祭りなどに積極的に参加したい」「祖父母ともっと話したくなった」と目を輝かせていました。

井口先生は「私たちはこの絵がみんなに何かを伝えるためにあると思う。通康さんのように精一杯生きて、いろんな人と出合って、自分の人生で大切なものを増やして」と願いました。

過去と今を比べると、今よりもっと広い未来が見えてきた

過去から新しい未来へ——

私たちは先の見えない未来にしか進むことができません。だから過去から学ぶことが大切になります。こんな学びの場になるなんて、通康さん自身も想像できなかったかもしれませんが、彼が一生懸命に生きた証は今、未来への道しるべになっています。

大好きな小田をずっと大切にしていね

地域の財産として未来につなぎたい絵です。細かく描かれていて、いずれの絵を見返しても多くのことに気付けます。子どもたちが地域のことを話す姿を見て、小田のことが本当に好きなんだと感じました。これからの小田を担う人たちなので、その気持ちをいつまでも大事にしたいと思います。



瀧田 なつきさん
(愛媛大学3年生)

一緒に学んだことが未来への道しるべ

「昔の方が楽しそう、行ってみたい」という声に、昔の人々の記憶が受け継がれているのを感じました。初めて知ったことも多かったと思うので、小田について詳しくなりたいことを、家族や友達と一緒に話してほしいです。大人になったとき、未来の小田について考えるヒントになれば、うれしいです。



湯谷 なつきさん
(愛媛大学2年生)

人とのつながりが地域の力なんだ

どの絵からも人のつながりの強さを感じました。私の父も地域の人と協力して田植えをしていて、僕自身が地域の人と関わる機会が増えています。機械だけに頼らず、人と助け合うことで地域や活動が元気になることを、土居さんの絵から改めて学びました。



上岩 かずひろさん
(小田中3年)

伝わる小田の暮らしの温かさ

家にキジ肉などがあり、食料を得ることが大変だったようです。でも絵は温かく、楽しそうに感じました。牛鬼や神輿、うどんなどは今も残っていて、人々がどのように暮らしを重ねてきたのかが伝わりました。私たちも大切にしたいです。



本田 のの乃さん
(小田小6年)

Interview
私の学び

参加した皆さんに
話を聞きました

笑い感動の初舞台

11月19日、金剛能楽堂で開かれた「三ノ会」京都公演。宮崎さんは「蟹山伏」の蟹の精役として初舞台に立った。「面をかぶるので体型や動きで笑いをとれるよう頑張る」と、堂々とした蟹を演じていた。



笑いと拍手が起こり、大好評だった（中央が宮崎さん）



満員の客席。宮崎さんの両親の姿もあった

公演の前日、狂言師・茂山千三郎さんの自宅内にある稽古場で、大粒の汗をかきながら練習に励む宮崎大知さん。取材を始める「狂言が楽しすぎて、ここまで来てしまった」と、笑顔がはじけます。

宮崎さんは小学5年生の時に始まった「内子こども狂言くらぶ」の最初のメンバーです。周りのサポートもあり、中学・高校と狂言を続け、この春から茂山先生に弟子入りしました。

「子どもの頃は内子町の皆さんが優しく見守ってくれていた。これからは、優しさに甘えてはダメな世界。先輩たちからも『終わりのない世界。休みなく稽古を積んできた』と聞いて、肝に銘じている」と語る表情は、少し大人びていました。

茂山先生の大ファンと公言する宮崎さんは「子どもの頃から怒られたことはない。でも求められる技術はどんどん厳しくなる。大変だけど、次までにできるようにになって、先生に褒められたいという気持ち——」。稽古が足りないときは家で自主練習し、声出しはカラオケボックスなどでしているそうです。

「目標は先生の相手役で舞台に

立つこと」と目を輝かせます。

初舞台については「うれしいけれど、目標まではまだまだなので、いい演技をして、それを続けられるように努力したい」と、通過点を強調。プロの狂言師として成長し、いつか内子町の子どもたちに狂言を教えることが夢とも語ってくれました。

茂山さんは「内子町の文化として、狂言が成長する過程の中心にいる大知。プロの世界は今までとは全然違うけれど、毎日、一生懸命に悩んでほしい」と激励し、内子こども狂言くらぶの子どもたちには「厳しさを乗り越えられるのは、好きという思いを育んでいるから。みんなの狂言が好き、内子町が好きという気持ちを膨らませてあげたい。それが未来の力になる」とのメッセージをもらいました。

最後に宮崎さんは「多くの人たちのおかげで狂言の道に立たせてもらった。自分が歩みを止めたら、後輩たちの道を閉ざしてしまうかもしれないという気持ちで頑張っている。狂言と出会えた内子座にも感謝。内子町で育ったからこそなので、その素晴らしさを自分も伝えたい」と前を見据えました。

my life Today
あなたは今日をどう生きますか

歩み始めた狂言師の道

今をただ、一生懸命に生きること。それが文化の種になる——

内子座創建100周年事業から始まった「内子こども狂言くらぶ」。100年先に内子座をつなぐために、狂言を内子の文化にという思いが込められています。宮崎さんは、その設立当初からのメンバー。この春から茂山千三郎さんの弟子となり、11月19日に初舞台を踏みしました。

宮崎 大知さん（18）
内子町富長出身



4



3

日々勉強、終わりなき道

3_兄弟子の黒川亮さんに衣装の選び方や扱い方を習う宮崎さん。兄弟子が集まるときには稽古に誘ってもらうなど大切にされている 4_公演の前日、茂山先生に直接指導を受ける。蟹の精の動きに磨きをかけていた



2



1

狂言の道、最初の一步

1_内子座創建100周年記念事業の一環で平成26年に発足した「内子こども狂言くらぶ」。最初の頃の稽古の様子。中央が宮崎さん 2_平成27年の「茂山狂言内子座公演」的一幕。宮崎さんは「菌」の男の役を演じていた

今日の積み重ねが人生



1_昔ながらのカラサオを使って豆を落とす作業 2_農作業の合間に妻の八重子さんと庭で一休み 3_天日干しした黒大豆の乾き具合を確認する完夫さん 4_軒先につるされた干し柿は冬の風物詩 5_栗の木に登って剪定作業。「まだまだ息子より仕事できるぞ」と完夫さん

毎晩、明日の時間を上手に使おうと考えながら寝ます

田村 完夫さん(90) = 石畳9 =

百姓をしていて、栗や柿、大豆、落花生などを作ったりします。養子として石畳に来たのが、終戦から少し経った昭和23年(1948年)頃。私が16歳になる年でした。当時は食べ物がなく大変だったので、百姓さまさまやったです。

若い頃は朝早くから夜遅くまで、よう働いたもんです。百姓ばかりだけど、雨が降ってもわらを編むなど、家でできる仕事をしよりました。しょうゆやみそ、草履など、何でも自分たちで作るのが当たり前。今でも夜寝るときに「明日は何と何の仕事しよう」と思いながら眠る。さぼろうとか今日は休もうとか思わんけん、もう性分なんよ。

ずっと大切にしているのは「思いやり」です。ばあさんのことは何でも分かったもんで、病気がちだか

ら重たいもんなんかは絶対持たせません。まずは夫婦と家族の幸せよな。隣近所も地域の人みんなも大事にせないけん。田舎やけん、みんなが助け合い、仲良くしてほしいわいな。

若い人らは、こんな時代で大変だけど、いろんな人と出会った方がいいと思います。それから、失敗しても頭で考えすぎてくよくよせんように——。なるようにしかならんから、心配したっていけん、というのが私の経験です。私も一日一日を大切に、一日でも長くばあさんと一緒に長生きできたらいいなと思います。



Interview

90歳を超えても、なお元気に働いている奥嶋さんと田村さん。喜怒哀楽、たくさんの「今日」を積み重ねた2人の話からは、今の時代だからこそ真似したい考え方や生き方、そして一日一日の大切さが伝わってきます。



1_毎週土曜日、作った野菜などを販売している「およりんか」(営業時間午前7時30分～午後2時)。2人ずつの当番制で店番をする 2_接客をする奥嶋さん。行き届いた目配り気配りがすごかった 3_畑にはきれいな大根や白菜、小松菜などが並び、丁寧に育てていることがうかがえる

いくつになっても出会いと学びは楽しみです

奥嶋ハル子さん(96) = 上田渡 =

昔の人の方が大変な仕事が多かったから、みんな根気強かったですね。今はいろいろな機械があるから便利で楽になって、しんどい仕事を好んでする人は少ないです。畑を打つ人も最近は見かけなくなったね。でも、今の人にそれを求めているわけではないんです。若い人に言ってもそれは無理な話。時代に合わせた生き方でいいと思っています。

私も若い頃から、いろんな仕事を経験しました。尋常高等学校を卒業してからは、病院や役場、嫁いだ先の旅館などで働きました。縫製業もして10人以上の人を雇っていたこともあるんですよ。男になり、母になり、社長になり、下っ端になり——その時々で一生懸命に生きてきました。

私は70歳の頃から健康維持のため農作業を始め

ました。「およりんか」に入るなら、売るもんがいるので野菜作りを始めたんです。作り方は本を読んで勉強して、分からんことは近くに農協があるので、そこに聞いてやってます。梅干しやラッキョウの作り方も講習会や近所の人に習っています。「およりんか」を続けているのは、いろいろな人と出会えるから。家におっても何もすることがないしね。畑のことやら、食べ物のことやら、96歳になっても教わることばかり。人と話を、新しいことを知れるのはいくつになっても楽しいです。



Interview

明日へつながる、光の渦を見つめて――

夜空を見上げると、満天の星空。

止まっているように見える星も

カメラで撮影すると、

意外と早く動いていることが分かります。

人生も同じかもしれません。

日々、同じような生活を送っていても

何かが少しずつ変わっています。

人生の輝きは、

「今日」を大切に――

一日一日の小さな輝きを集めたものと

人生の先輩たちが教えてくれました。

変化しても、変わらない思いを伝えること

変化するからこそ、失くしてはならないこと

過去から学び、また明日へ進むこと

今をただ、一生懸命に生きること――

一人一人の輝きがつながることで

町の輝きになるのならば

その光がきつと、子どもたちを

明るい未来に導いてくれるはずです。

今日と明日の間で輝く星空を見上げながら

私が今日、どう生きたか

明日をどう生きたいか考えたいと思います――